

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：17301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25590115

研究課題名(和文) アジアからの社会学を求めて その基礎的研究

研究課題名(英文) Search for sociology from Asia; a fundamental research

研究代表者

中村 則弘 (NAKAMURA, Norihiro)

長崎大学・多文化社会学部・教授

研究者番号：10192676

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：(1)アジア非一神教世界の特性として、万物を流転するものと捉えられ、その多様性と流動性について基本的に両義的關係を軸として理解されていた。(2)偶然の機会を重視し、共存と調和の実現こそ重要となっていた。(3)新たな事物の生成や創造は、両義性に示されるような相異なるものの融合・習合から生み出されていると把握されていた。(4)明瞭性と曖昧性、静と動など相互補完關係への着目こそ意味を持つことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The major findings are as follows:(1)as a characteristic of non-monotheism world, it is regarded that all things are in a state of flux, and its diversity and fluidity are basically understood with the ambiguous relations as the core.(2) Emphasizing accidental opportunities, regard coexistence and harmony as important.(3)the production and formation of new things was grasped as being created from syncretistic fusion of different things as shown in ambiguity.(4) It became clear that focusing on mutual complementary relations such as clarity and ambiguity, static and dynamic has important meaning.

研究分野：社会学

キーワード：両義性 流動性 相互補完 相互融合 偶然性 非一神教世界 アジア

1. 研究開始当初の背景

これまで、中国を中心とするアジア社会、日本の地域発展についての研究を重ねてきた。また、関連する欧米研究者とも討論を重ねてきた。これら取り組みのなかで、アジアの歴史社会的な知・知の体系、とりわけアジア非一神教世界のそれを基軸においた理論形成が求められているのでは、ということ強く感じている。もちろん、西欧世界に根拠をおく諸理論の水準の高さは十二分に承知している。また、日本におけるこれまでの理論蓄積の重要性も実感している。ただ、いまの時代状況が、アジアからの社会学を必要としているとみている。

この着想は唐突に思いついたものではない。これまで拙著『台頭する私営企業主と変動する中国社会』(ミネルヴァ書房,2008年)、拙著『脱オリエンタリズムと日本における内発的発展』(東京経済情報出版,2008年)でその可能性に論及し、さらに拙編著『脱オリエンタリズムと中国文化』(明石書店,2009年)で、本研究と関連する中国における「渾沌」の歴史的意義をまとめている。

改めて言えば、これら成果にかかわる国際学会での報告を通じて、研究目的で示した思いを抱いたのである。手前味噌であることを承知しつつ、報告に対する反響から、まさに時代が求めている独創的内容につながっていると確信している。人類学領域ではあるが、スタンフォード大学の Harumi Befu 教授からは、日本人研究者が世界に向けて発信すべき研究内容である、と期待が寄せられている。また、アジア学にかかわる COE 研究において、課題として主張されている、「従来のディシプリンの枠組みを超えたアジアからの理論構築」に対するささやかな返答ともなっている。

この研究については、一応ながら、南方熊楠、柳田國男、鶴見和子、梁漱溟、陸学芸などの系譜の延長上にある。ただ、目的と視座は大きく異にしている。

2. 研究の目的

グローバリズムの進展のなか、欧米の社会学理論に対して、アジア非一神教世界の知・知の体系にもとづく理論構築が必要ではないかという痛切な思いがある。これは欧米の社会学研究者が語ることをためらう、われわれへの期待なのではないかとすら感じている。そこで、欧米文化を基盤とする既存の諸社会理論を補完し、また社会学研究に対する新たな地平を開く研究を行うため、「アジアからの社会学を求めて その基礎的研究」を構想した。この研究の目的は、欧米とは異なる 価値体系からの社会学を構想するとともに、現代社会の幅広い問題解決に、革新的な視座を提供しようとするところにある。

3. 研究の方法

(1)分析枠組みの再検討を行う。『四書五経』、

『莊子内外雑編』、『大パリニッバーナ経』、『大日経・金剛頂経』、『華嚴経』、『中論』、『ヴェーダ』を中心に、アジア非一神教世界からの分析概念および方法論的前提について理論的整理作業を行う。また、欧米の社会学理論を アジアからみた社会学という視座からの位置づけを行う。

(2)資料調査、聞き取り調査を行う。北東アジア、とりわけ日本と中国・台湾を中心に実施する。あわせて、東南アジアのカンボジア、ネパールでも実施する。ただし、周知のとおり、中国での調査実施については不確定な要素が多々残っている。そのため、対象地はアジア一円を含め柔軟に設定することを念頭に置く。海外調査の実施にあたっては、研究協力者からの協力を得ることとし、調査対象は現地のコミュニティ・企業・行政・宗教の関係者とする。

(3)北東アジアにおける調査結果について、欧州を含めた一神教世界との比較検討を行う。また、分析枠組みに対する欧州およびアジアの幅広い研究者からの批評を受ける。

4. 研究成果

(1)分析枠組みに関わる理論的整理についてである。『四書五経』、『莊子内外雑編』、『大パリニッバーナ経』、『大日経・金剛頂経』、『華嚴経』、『中論』、『ヴェーダ』を中心とした儒教、道教、仏教、ヒンドゥー教についての古典文献の整理を行い、理論的な枠組みの検討作業を行った。

そのなかで、生々流転の承認、偶然の契機の内包化、根源的多様性の承認、あるがままの存在の肯定などが概ねではあるが共通認識として確認できた。ただし、その度合いについては、古典各々で、また内容各々での大きな幅があることも明らかにでき、これはアジア非一神教世界の特性そのものに関連していた。

(2)アジア非一神教世界の共通特性について。そこでの特性は、根源的多様性、万物流転への価値付与ということに集約することができた。そこから、その多様性と流動性は、概ねではあるが両義的な関係を軸として認識されていることが明らかにできた。

(3)社会における創発性について。新たな事物の生成や創造は両義性に示されるような相異なるものの融合・習合からなされると概ねだが把握されていた。このような生成と創造については、偶然性の契機に重きを置いたものとなっていたことも併せて明らかにできた。引いては、西欧社会学の妥当性の限界も明確化することができた。

(4)環境社会学と関連する文明論への展開の可能性についてである。E.F.シュマッハー、

レオポルド・コール、サティシュ・クマール、I.イリイチ、さらにはK.ポランニーの価値前提を問い直し、宇井淳、中岡哲郎、小島麗逸、玉野井芳郎らの東アジアにかかわる議論に検討を加えた。そのうえで、孔子、荘子、老子を中心とする中国思想、道徳経・涅槃経、J.ニーダムの中国科学史の研究についての理論的整理を行いつつ、以前に中国調査によって得られた諸データの再分析を行った。また、ネパール・カトマンズ、台湾・高雄市での地震後の対応についても分析の参考とした。

これらの検討から、アジア非一神教世界からの社会学を考える上で、とくに実証的なものについては、環境領域が重要な柱となることが明らかになった。それはとりわけ、文明論、価値意識に関連する内容において大きな意味をもつことが提起できた。

(5)アジア非一神教世界における行動レベルの特性についてである。行動のレベルでは外在的な法や規範ではなく、内面的な自律や自制に重きが置かれていたことが明らかにできた。

(6)アジア非一神教世界からの社会学の概念提起についてである。台湾、中国、カンボジア、日本においての実地調査を行い、調査結果の検討作業をオランダ、カンボジア、ネパール、中国、台湾および日本の関連研究者との間で行った。

その結果、アジア非一神教世界からの社会学を考えると、両義性、流転性、転換性、曖昧性と結びついた、「無常」、「化身」、「渾沌」、「規矩」、「和諧」、「作法」、「縁分」、「融合」、「習合」といった諸概念が重要な意味をもつことを、実証的に解明できた。

さらに、行動レベルからの社会的な創発性 を考えると、「邂逅」、「自覚」という概念についての着目が不可欠であることを明らかにした。

(7)アジア社会学と欧米社会学の相互補完の重要性についてである。アジア社会学は両義的世界、流転する世界、転換する世界、曖昧な世界という認識を前提とするものとなる。これは欧米社会学とは排他的な関係をもつものでは決してないことが明らかにできた。アジア非一神教世界が、静と動、陰と陽、明示と暗黙、明瞭さと曖昧さのような両義的なものの相互補完的な関係を重視しているのと同じアナロジーから、アジア社会学と欧米社会学は相互補完してこそ、人類史に大きな貢献を成しえるものとなることを指摘できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

中村則弘、環境社会の文明論的視界と歴史的にみた中国・アジアの価値意識 「悪魔の礪臼」からのオルタナティブ、日中社会学研究、査読有、25巻、2016、28-35、ISSN 1340-5233

中村則弘、グローバリズムとチャイニーズネスにかかわる分析視角 国民概念をこえたオルタナティブな枠組み 日中社会学研究、査読有、22巻、2014、1-4、ISSN 1340-5233

中村則弘、底辺階級からみる中国 グロテスクさに可能性を求めて 中国21 査読有、40巻、2014、101-116

中村則弘、民衆世界の復権と東アジア共同体のオルタナティブ 日中社会学研究、査読有、21巻、2013、19-26、ISSN 1340-5233

[学会発表](計 9件)

中村則弘、尋求“両義互補”、“万物流転” “世界観を基礎的社会学；關於“共存”与“和階”的東亜視界、全球化・固体化時代の中国社会和文化學術研討会、中国社会学会(中日社会学專業委員会)(招待講演)国際学会)2016年11月13日 南京大学(中国南京市)

中村則弘、両義補完と生々流転にもとづく社会学を求めて 共存と調和をめぐるアジア的視点 日中社会学会 2016年6月4日 ブリックホール(長崎県長崎市)

中村則弘、両義性、流動性及其代替方案；全球化時代亜州の提問、中国社会学会(中日社会学專業委員会)(招待講演)(国際学会)2015年10月17日~2016年10月18日、南京大学社会学学院(中国南京市)

中村則弘、追求《小傳統》を基礎的東亜連帯、高雄応用科技大学国際ワークショップ、2014年11月16日、高雄応用科技大学・(台湾高雄市)

中村則弘、從「海角七号」来看的日台關係、高苑科技大学国際研究集会、2014年9月19日、高苑科技大学・(台湾高雄市)

中村則弘、区域發展的代替方案；依拠亜州視角、高雄応用科技大学国際ワークショップ、2014年9月7日、台湾国立高雄応用科技大学・(台湾高雄市)

中村則弘、Reconsider the Asian

Value、Asian Forum for Social Research and Practice (AFSRP) and IFSO、2013年12月8日、成城大学(東京都・世田谷区)

中村則弘、底辺階級与流氓文化 在中国社会怪異性中尋求展望、日本社会学会 2013年10月13日、慶應大学(東京都・港区)

中村則弘、『小伝統』を基礎とした東アジア共同体に向けて アジアからのパラダイム変換、日中社会学会、2013年6月1日、成城大学(東京都・世田谷区)

〔図書〕(計 3件)

中村則弘他、北海道大学出版会、現代中国の宗教変動とアジアのキリスト教、2017、17(281-299)

中村則弘他、春風社、コミュニティ辞典、2017刊行予定、2(36-37 予定)

中村則弘他、吉林文史出版社、地震・救援・重建の日中比較研究 全球化社会関係資本的視角、2014、12(121-132)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 則弘 (NAKAMURA, Norihiro)
長崎大学・多文化社会学部・教授
研究者番号：10192676